

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520332

研究課題名(和文) スペイン内戦は詩人の世界観、詩のイデオロギー表象、音韻構造の相関性をどう変えたか

研究課題名(英文) How Spanish War changed poets' worldview, ideological symbols and metrical scheme

研究代表者

辻 昌宏 (Tsuji, Masahiro)

明治大学・経営学部・教授

研究者番号：00188533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：スペイン内戦を直接見聞することにより、詩人マクニースの意識は揺さぶられ、それまで比較的中立的であった態度から共和派へコミットするようになる。しかしながら、コミットを表明する仕方は、プロパガンダ的なものではなく、長詩『秋の日記』における音韻のシステム、とくに韻の踏み方およびスタンザの構成方法を徐々に変えていくことによってであった。その微細な変化のさせ方を解析し、独特のスタンザ構成法を明らかにした。一方、オーデンの場合には、スペイン内戦に関わった後に、日中戦争のさなかの中国へ赴いたが、そこでは全く古典的なソネットを書いている。詩の韻律的構造が内面を保護している可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Louis MacNeice had been politically more or less neutral before he went to Barcelona during Spanish Civil War where he experienced the bombardment. His conscience was shaken and he changed his attitude towards the ideology and international politics and determined to show his solidarity with Spanish citizens. But he showed it not in a propagandistic way but in terms of his rhyming scheme in his long poem 'Autumn Journal'. We analysed how he changed systematically the rhyming pattern. In case of W.H. Auden after he went to Spain, he went to China during Sino-Japanese War. He wrote a classical style of sonnets. We conclude he used the formal rhyming structure most probably to create a kind of order within his mind.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：音韻構造 マクニース オーデン イデオロギー表象

## 1. 研究開始当初の背景

1930年代の詩人に関する研究は、冷戦時代にあつては、個々の詩人と政治的なイデオロギーとの関わりに着目されることが多かった。そのためルイ・マクニースのように特定の政党や政治的立場に積極的にコミットしなかった詩人は、ともすればオーデンの影に隠れてしまい、オーデンの亜流とみなされがちだった。しかし冷戦終結後、イデオロギー面だけでなく、詩人の出身地域や階層、宗教的背景が見直されるようになってきた結果、マクニースはとりわけ北アイルランドの現代詩人たちの先駆けとして認識されるようになってきた。

研究メンバーの辻と高岸は2007年に開催されたマクニース生誕100年会議に出席し、イギリス、アイルランドをはじめとする各国のマクニース研究者と情報交換をし、また、辻はIasil Japanのシンポジウムでマクニースの政治的中立性について発表し、第一線の研究者からの反応、意見を得た。マクニース生誕100年会議の前後から、マクニースに関しては、Stallworthy (1995)による伝記や新版の全詩集、あるいは長らく絶版となっていた詩集や批評集などの復刊がなされ、2010年には書簡集も刊行された。

オーデンに関しては、プリンストン大学出版局からテキスト校訂を付した全集が随時刊行中である。近年のオーデン研究では、Arthur Kirsch (2005)の*Auden and Christianity*に見られるように、オーデンの社会主義への傾倒よりも、むしろ、キリスト教からの離脱と回帰が着目されている。

こうした例に見られるように、1930年代に活躍した詩人に関する言説にキリスト教や宗教との関わりという新たな視点を加えることが可能になるような一次資料がアクセス可能になってきている。

1930年代の国際的な政治状況、とりわけスペイン内戦は、当時の詩人にとっても衝撃だったと考えられる。その衝撃は作品においてどのような表現形態をとって現れているのかを、知る方法を追求しようと考えた。

## 2. 研究の目的

W.H.オーデンおよびルイ・マクニースがスペイン内戦および当時の国際的な政治状況を、作品世界に反映させたかを調査する。

スペイン内戦が、詩人の世界観・宗教観をどう変革し、その結果、英詩におけるイデオロギー表象および音韻構造をどのように変えていったかを明らかにし、世界観・宗教観と表象および音韻構造の相関関係を明らかにする。

従来は、1930年代の詩人に関して、社会主義あるいはファシズムといった政治的イデオロギーとの関わりが重視されてきたが、イデオロギーを政治思想に限定せず、より広く宗教的なものまで拡張して考えることで、詩人の教会や宗教との向きあい方、またその

変化を知ることで、スペイン内戦がイギリスの詩人たちに与えた影響を複合的に測定しようと考えた。

## 3. 研究の方法

スペイン内戦が英詩人の内面とイデオロギー表象をどう変えたかを明らかにするという目的のため

(1) 1930年代詩人による詩作品について、詩のイデオロギー表象を抽出し、音韻構造(韻律、音韻の有無、フリーヴァースの使用の有無)を解析する

(2) スペイン内戦時に流通した言説・プロパガンダにおけるイデオロギー表象と、詩人の宗教観、世界観の変遷を整理し、相互参照する

そのため、定期的に研究会を開催し、個々の詩人の詩作品の読解を時期ごとに進め、作品ごとに、イデオロギー表象(宗教、政治思想、プロパガンダ)と音韻構造(押韻の有無、規則的韻律の有無、フリーヴァースの使用の有無)を解析する。

## 4. 研究成果

(1) W.H.オーデンの場合には、スペイン内戦の比較的初期にスペインに赴いて、それについての詩を書いたが、内戦や政治的状況については沈黙を保った。その後、中国へ旅行し、詩と旅行記を書いたが、そこでは音韻形式が整ったソネットを書いていることがわかった。それは外なる混乱に対抗するために内なる秩序を守るために形式の整ったソネットを書いたのではないかと考える。

オーデンは1937年の1月から3月にスペインに渡っている。この時点では市民として何かをしなければならぬと考えての行動であった。オーデン自身は、「詩が直接的に政治的である必要があるとは思わないし、そうであるべきだとすら思わないが、われわれの時代のように危機的な時期には、詩人は主要な政治的事件に関しては直接的な知識を持つべきだと思う」と述べている。

帰国後「Spain」(後に「Spain 1937」と改題)を書き、5月にパンフレットの形で出版している。この詩のあるフレーズをきっかけにジョージ・オーウェルの攻撃を受け、オーデンは自分の意図が誤解されたと感じたが、1940年にはそのフレーズに修正を加えている。

オーデンはイシャーウッドとともに日中戦争中の中国を1938年に旅し、「In Time of War」というソネット連作を書いている。この連作は、2人共同の旅行記に納められているのであるが、1939年に出版された初版と1973年に著者自身が改訂した第二版(現在もこれが出版されている)では相当に内容が異なっていることが判った。オーデンに関しては、詩に関しても、字句を改変したり、場合によってはスタンザ単位で削除してしまったり、あるいは詩そのものを全詩集から抹消

してしまったりするなど、初出の時点から相当の時間が経過してから手を加えたり、削除してしまったりするので注意が必要であり、この点（作品の修正、削除）に関しての考え方がマクニースとは対照的であることがわかった。マクニースは、原則として、初出から数年間は手をいれることもあるが、それ以降は独立した作品と考え、原則として改稿しなかった。

（2）ルイ・マクニースは、スペイン内戦の末期に、バルセロナに赴いた。バルセロナやその近郊で彼は爆撃にもあっているし、バルセロナ市民の食事にも満足に取れぬ様子も間近で見ている。彼は24歌からなる長編詩『秋の日記』の終盤3分の1のところまで音韻形式、特に押韻のパターンを微妙に少しずつ変えていくことで、スペインの市民への連帯を表現した。さらにそれを表現する際にはキリスト教の象徴を有効に用いていることが判った。

研究代表者の辻および研究分担者の高岸はオックスフォードおよびバルセロナにおもむき、オックスフォード大学ボードリアン図書館でマクニースの詩や書簡の貴重な手稿資料を閲覧・写真撮影して、基礎資料収集を実施した。またバルセロナではカタルーニャ歴史博物館では、スペイン内戦当時の状況を示す資料や展示を見学し、マクニースやオーデンが詩に描いた当時のスペインの資料を収集、記録した。

高岸はロンドンのブリティッシュ・ライブラリーで、マクニースの詩や戯曲の音声資料を聴取し、音韻や音響効果について考察した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

辻 昌宏 「モダニズムと1930年代詩人における詩生成のプロセスと音韻システム」、明治大学人文科学研究所紀要第72冊、査読有、2013、pp.89-124

辻 昌宏 'The renouncement of Louis MacNeice's neutrality reflected in his rhyming scheme', Journal of Irish Studies, 査読有、2012、Vol.27, pp.11-18

〔学会発表〕(計 3 件)

シンポジウム「モダニズム再考—マクニース再評価の文学史的意義を考える」日本英文学会関東支部第7回大会（明治大学駿河台キャンパス、2013年6月22日）中尾まさみ司会、辻 昌宏、道家英穂、高岸冬詩

高岸冬詩、「マクニースの詩の風景—『秋

の日記』を中心に」、東京都立大学・首都大学東京英文学会、2013年12月14日、首都大学東京南大沢キャンパス

高岸冬詩、シンポジウム 'Wounds and Cures' において 'Wounds Kept Green: The Remedial in Northern Irish Poetry' を発表。IASIL Japan, 2011年10月8日、同志社大学今出川キャンパス

〔図書〕(計 2 件)

辻 昌宏、木村正俊、松村賢一、春木孝子、池田寛子、真鍋晶子、大嶋浩、岩田美喜、山崎弘行、原田範行、森川寿、伊達恵理、浅沼恵、久保田重芳、松田誠思、結城英雄、井勢健三、太田良子、佐藤泰人、北文美子、清水重夫、坂内太、河原真也、佐藤亨、水崎野里子、奥田良二、船戸成子、星野恵里子、榎木伸明共著『アイルランド文学 その伝統と遺産』、開文社出版、2014年、総ページ698ページ、辻執筆は第20章「ルイ・マクニース イデオロギー的中立と連帯のはざままで」pp.426—447.

道家英穂、新見肇子、鈴木雅之、大石和欣、笠原順路、鈴木美津子、ジュディス・バスコー、西山清、大河内昌、小口一郎、小田友弥、川津雅江、アルヴィ宮本なほ子、マイケル・ブラッドショー、アレックス・ワトソン、牛山通子、中村麻衣子、スティーヴ・クラーク、トリスタン・コノリー、佐藤光、和田綾子共著『揺るぎなき信念—イギリス・ロマン派論集』、彩流社、2012年、総ページ466ページ、道家執筆は「ロマン派へのアンビヴァレントなまなざし—ルイ・マクニースの詩と詩論」pp.299-317.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 昌宏 (TSUJI, Masahiro)  
明治大学・経営学部・教授  
研究者番号：00188533

(2) 研究分担者

道家英穂 (DOUKE, Hideo)  
専修大学・文学部・教授  
研究者番号：70198000

高岸冬詩 (TAKAGISHI, Toshi)  
首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・  
教授  
研究者番号：20248917

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：